

日本における創薬バイオベンチャー Japanese Biotechnology Companies Aiming at Drug Discovery

古市 泰宏
(株)ジーンケア研究所
Yasuhiro FURUICHI
GeneCare Research Institute Co. Ltd.

2001年をピークとして本邦に多くのバイオベンチャーが生まれた。

きっかけは、政府先導のかけ声、全国的に発生していた地域コンソーシアムからのベンチャー設立、文部科学省の大学発ベンチャー創出支援制度などができたことであるが、「我が国の産業活性化のためには、米国シリコンバレーにならった中小企業の育成が必要」という一般的認識がベンチャー企業の誕生を促進したといえる。これに加え、研究最前線が応用へ向けて拡大したということもある。この時期、ヒトゲノムの解析が終了を迎え、ゲノムブームが到来し、いろんな観点からゲノムデータを利用したビジネスが可能になったということもある。この傾向は世界的にも共通で、米国以外の国々でも、多くのバイオベンチャーが同時期に設立されている。一般に、ベンチャーは経営基盤が脆弱であるので、倒産するリスクも高い。しかしながら、産業基盤技術を「下支え」し、将来的には我が国の経済に良い結果をもたらす重要な存在であるので、政府並びに金融界が保護策を用意されることを期待している。バイオベンチャーといっても範囲は広いが、どの分野であっても、成功の秘訣は、「高い専門性」、「良いサイエンス」、「特許など知的所有権」、「ニーズのある商品選び」が必要であり、飛躍するためには、国際感覚とアライアンス感覚が重要である。

バイオベンチャーのうちの創薬ベンチャーはこれまで最も衆目を集めてきている。

職種・機能としては多岐に分かれ、「小分子化合物医薬品の探索」、「標的遺伝子やタンパクの生化学」、「探索ツールの作製」、「遺伝子やタンパクのバイオインフォマティクス」、「病態モデル動物の作製」、「薬物動態・ファーマコキネティクス」、「In silico ドラッグデザイン」、「微生物利用」、「コンビ合成・最適化」など多彩である。もちろん、大手の製薬会社にはこれらの機能の大方はそろっているのであるが、手薄なところはベンチャーの専門性の高い技術を借りることになり、そこにベンチャーのビジネスチャンスが生まれる。従来、薬学は「八百屋の学問であり、何でもある」と言われてきたが、ベンチャー群の多彩な機能を見ていると、薬学部の各講座を見ているようである。実際、大学薬学部はインキュベーターの役を十分に発揮できるはずであり、ベンチャー育成の場として適していると思える。しかしながら、多くの創薬型バイオベンチャーが薬学出身者によって作られたかという「そうでもない」というのが現実である。薬剤師という一種の身分保障がベンチャー設立への気運を抑えているのかもしれない。

私は、2001年4月以来、共同研究者同志達と共に、(株)ジーンケア研究所という創薬型ベンチャーを設立し、社長をつとめている。社員は31名、苦労は多いが、前途洋洋という慰みはある。それまでの30年間は、分子生物学の分野で研究者として生きて来たのであるが、停年を迎える歳になって、ベンチャービジネスの世界へ飛び込んだ。苦労は覚悟していたことでもあるし、難問は次々と立ちちはだかるが、全てチャレンジ精神で対処している。本講演では、ベンチャーの創設者として経験した「良いこと・辛いこと・夢」や、これまでに学んだ「成功するベンチャーに必要な要件」などについて、同じ背景をもつ薬学出身者へお話し、今後ベンチャー立ち上げを考えていられる方の参考にしたいと思っている。